

論文の内容の要旨

論文題目 幕藩権力下の尼寺に関する宗教政治史的研究

氏 名 具 知 會

本論文は、幕藩権力下における尼寺の位置づけおよびその政治的役割を考察したものである。そのために、尼僧や将軍家女性を始めとする上層武家女性の交流形態を、宗教政治史的視点から分析することで、女性と権力との関係の究明を試みた。具体的事例として、関東の東慶寺・英勝寺・満徳寺の三尼寺を取り上げ、これらの寺院の建立・中興から、その後も尼寺として維持されてゆく経緯を、各寺院をめぐる諸関係を通じて分析している。

第一章では、個別寺院の事例を取り上げる前提として、江戸時代の尼寺をめぐる一般的な時代背景について整理した。具体的には、江戸幕府の寺院政策を時期別に概観しながら先行研究を整理したうえで、女性を視野に入れた新たな研究史的画期を提示し、江戸時代の幕藩権力下における尼寺と尼僧の存在形態をまとめている。その結果、大奥が寛永期に多数の寺院建立と中興に関わることで、幕藩体制の構築に貢献したことを浮かび上がらせると同時に、江戸後期に不安定となってゆく体制を補完する政治的な性格を帯びた存在として、大奥がふたたび寺院を支援したことを明らかにした。幕藩体制下の尼寺と尼僧は、寺院体制を整備してゆく上で僧寺と比べて幕府による制限が多く、不備な点を残したままであった。たとえば尼寺は、檀家を持つことができないという制約を抱えた周縁的な存在であり、権力者の庇護がなければ維持することが難しかった。この点から、本論文で取り上げた東慶寺・英勝寺・満徳寺は、いずれも将軍家との関係性により江戸時代を通して尼寺として維持されたという意味で、特殊な事例に属する。この点を踏まえて、以下の各章では具体的分析を進めた。

第二章では、中世尼五山の一つであった鎌倉の東慶寺を取り上げた。江戸幕府の成立後、中世以来維持されてきた東慶寺をめぐる諸関係は再構築されていく。その過程について、同寺尼僧の活動を中心に分析した。東慶寺は、中世には関東公方足利家の女性が住持を務めていたが、江戸幕府が開かれると将軍家の女性の中興に関わった。その後、東慶寺尼僧は関東公方の後裔である喜連川家から住持を迎えることを希望した。このことは、東慶寺側が江戸時代においても、中世以来の由緒の維持を重視していたことを意味する。しかし、江戸中期以降になると、東慶寺尼僧と喜連川家のあいだの訴訟をきっかけとして両者の関係が断絶し、この由緒を象徴していた住持はいなくなった。そこで幕末期の尼僧は、天皇家との関係を顕彰する新たな由緒を創造することで幕藩体制下への順応を図った。このように、東慶寺の尼僧は時代の趨勢を読み取って由緒を維持し、寺院の存続のために能動的に体制に働き

かけていた。

第三章では、徳川家康の側室英勝院により建立されたのち、幕府から高い寺格を与えられ庇護された鎌倉の英勝寺を取り上げた。ここでは、同寺が水戸徳川家の御殿寺院としてどのような特性を持っていたのかについて、とくに住持が行った交流を中心に分析した。将軍は、英勝寺と同じく鎌倉に所在する東慶寺及び旧関東公方の影響力を意識して、英勝寺を格別に待遇した可能性がある。ここから、英勝寺が将軍家の武運長久と菩提を弔う役割を果たし、御殿寺院という寺格に位置づけられる必然性が説明できよう。その住持は水戸徳川家出身という高貴な身分であり、ときに寺院経営も水戸藩政の一部に取り込まれていることさえあった。さらにそのような位置づけが、周辺寺院との関係にも影響力を及ぼしたことに注目した。このような特殊な性格を背景に、江戸時代を通じて英勝寺住持は宗教者としての役割のみならず、将軍家や開基英勝院が構築した諸武家とのネットワークを継承・維持した。このような関係については、特に将軍家との交流に大奥が介在していることが特徴的である。英勝寺が高い寺格を付与された理由として、すでに住持の出自が将軍家と近縁関係にある水戸家であることを指摘したが、このような親密な関係はなかば御内的であるがゆえに、大奥という非公式のルートを通じて保たれていたことになる。

第四章では満徳寺を取り上げた。まず、13世紀新田得川氏建立の由緒を持つ同寺が、江戸初期に徳川家の先祖宣揚政策により中興され、将軍家の位牌所、宮廷寺院としての性格を持つに至る過程を明らかにした。ついで大奥と尼寺の関係から生まれる女性のネットワークを中心に分析し、将軍家との関係の特徴を論じようとした。満徳寺の場合も、徳川家との由緒を構築するうえで将軍家女性の果たした役割が大きかった。江戸後期になると、将軍正室との関係を構築して経済基盤を固めるなど、宗教的かつ経済的にさらに将軍家と深い関係をもつ徳川家の宮廷寺院としての性格を持つに至る。このような将軍家女性の活動は、弱体化した将軍家の権威を補完しようとする公儀の一員としての彼女たちの意識をよく示している。

第五章では、これまでの分析を踏まえながら、上層武家女性による寺院建立・中興活動の政治的な目的に包括的に注目した。ここから大奥と寺院の交流の特性を一般化し、本稿の主眼である、尼寺が幕藩体制下で担っていた宗教政治史的役割を明らかにする。寺院に対する上層武家女性の様々な働きかけは、彼女らが将軍家の政治的影響力拡大を念頭に置き、自らを公的にその一端に位置づけたことの表れにほかならない。それを可能にするうえで、将軍家と尼寺の身内的な女性ネットワーク形成の中心に大奥が立っていたことの重要性をあらためて明らかにした。これにより、先行研究ではともすると、幕藩権力が定めた寺院秩序からの疎外ばかりが強調されてきた尼寺は、むしろそれゆえに幕府から特殊な寺格を与えられ、宗教政治史的に重要な役割を与えられたのである。

以上各章の分析を踏まえ、本論文は以下の結論に達した。

本論文で取り上げた尼寺の住持らは、第一に将軍家など有力檀越の武運長久を祈るという宗教的任務と同時に、住持自身が名家の一族として寺院の由緒を体現する象徴的な存在

でもあった。したがって、こうした尼寺を建立・中興した将軍家女性の活動を、たんに個人の信仰活動に収斂しようとする従来の理解は不十分である。むしろかなりの程度、政治的な性格を持つものであったことを評価しなければならない。将軍家女性は、寺院の中興・建立を通じて江戸を中心とした寺院システムの成立過程に参加し、さらには公儀に関わる寺院の由緒形成にも寄与した。こうした尼寺は江戸時代を通じて、将軍家のみならず同宗派の僧寺や他の尼寺、さらには地域の寺院・村人など諸交流の結節点としても機能したことを強調しておきたい。このような女性たちと尼寺を結び合わせていく上で、大奥を中心として構築された女性ネットワークが、総体として公儀の一部としての性格を持っていたことは言うまでもない。尼寺が幕府からその地位と役割を公式に認められる上で有効に機能したのは、このいわば身内的なネットワークである。この点は、幕藩制下の公的制度により位置づけられた僧寺と根本的に異なるユニークな特徴であった。

総じて本論文は、当時の支配層の女性の宗教活動に対する多様なかわり方を、おもに政治面から明らかにした。支配層の女性が自身に縁のある尼寺を建立・発展させたのは、体制維持への寄与を期待していたからに他ならない。そうであれば、こうした尼寺に所属する尼僧もまた、公儀への奉仕者としての意識を持つことは当然である。尼寺に対する幕府の庇護は、彼女らの公儀への忠誠に対する見返りなのであった。このように、従来女性集団であるという理由で、権力秩序から排除されたり社会的に下部に位置づけられていたと評価されがちであった尼寺が、制度上は例外的存在であったがゆえにむしろ権力との強い連帯をもち、体制の構築や維持にも寄与したという、近世女性と権力との関係を究明したことに本論文の最大の意義がある。